

白日 屑 夢

津高文芸部

目次

異端児、走る（古井論理）	……三
短歌（砂時計）	……六
雪融けの神様（綿夏）	……七
ある女子生徒の話（はえぬき）	……九
さよなら、私の最後の初日（古井論理）	……十三
風見鶏（こまつな）	……十七
白椿（帷子渡海）	……十八
文芸部前階段にて（秋雨ナノ）	……二十一

異端児、走る

古井論理

僕は、部長ではない。部長になる機会は先生方に潰された。それなのに僕は中学卒業を前に、高校受験直前の木曜日、それも土砂降りの雨が降る気温十四度の午後を自転車で走り抜けている。右手には一昨年死んだ祖母が使っていた老人向け携帯電話「らくふぉん」のストラップを握り、いつ来るかわからない部活の仲間だった同級生たちからの電話を待ったが、携帯電話は一向に振動しないまま一軒また一軒と調達候補リストから花屋が消えていく。早くどうするか決めてくれないと、徒労に終わっても僕には何一つ得はない。

「仕方ない、当日集まるように前日言うか」

そう割り切ろうとしたが、結局僕は花屋巡りを誰からの連絡もないまま完走することになった。受験に自信があるとはいっても、なぜ部長でもない僕が部長にさせてくれなかった先生のためにこんなきつい仕事をしているのか、そればかりが心の中でどろどろと混濁しては嫌な結論を導く。

『部長が無能だからだ』

こんなことは言いたくない。本当にそう思う。でも、練習をサボってずっと喋って、拳句の果てに部活内部の不和を招いた部長以外に責めるべき人を僕は知らない。

「今年は顧問の藤田先生に花束を贈ったりしないんですか？」

僕がそう聞くと、仲間たちは言った。

「部長からは何も聞いてない」「誰かがやるでしょ」

僕はもう駄目だと思った。そして全員に一人ずつ、「花を買いに行くのか」と聞いてみたが誰も行くとは言わなかった……部長でさえも。

——そういうわけで、僕は花を買いに行くことにしたのだった。びしょ濡れの僕の手の中で、携帯電話がぶると震え、着メロの『世界の車窓から』を奏でる。吹奏楽部でまだ現役だった頃、一度吹いてみたいと思って言い出せなかった曲。新しい伝染病が流行りだしてしまった今は、もう後輩たちも満足に練習すらできないという。

「申し訳ないな」

そう思いながら、携帯電話を開き通話開始のボタンを押す。

「もしもし、松木です」

「ああもしもし松木？」

かけてきたのはチューバックスを吹いていた華村さんだった。「どうしたんですか？」

僕は質問する。華村さんは僕に真っ先に電話番号を教えてくださいました。つまり、一番協力してくれそうな人だ。

「みんなでライングループを作って、松木が手配できなかったらなんとかするってことになったよ。みんな参加してるし、これで人数も増えたね」

緊張する僕との間に電話を隔てて、華村さんは何でもないとを言うかのように語った。

「ほ、本当ですか？」

「嘘ついても意味ないって。で、花は手配できたの？」

「それが……」

僕は事情を説明する。

「そう、ありがとう。じゃあ、私たちがなんとか頑張ってみるよ」

華村さんは少し憐れみのこもったような声で僕をねぎらいながら言った。僕は自分の発言をさらに解説する。

「そうじゃなくて、花屋は全部駄目だったんです」

「そっかあ……じゃあ、今から私たちが造花とかも含めて探してみる」

華村さんはそう笑いながら言った。僕は慌てて華村さんに、咎めるように尋ねる。

「明日は後期受験ですよね？」

「一番難しい高校を受ける松木に言われてもねえ」

この人たちは、本気だ。そう確信した。僕はせめてもの良心を込める。

「第一志望に受かるのは最低条件ですよ」

「そうだね、全員第一志望に受かるから」

華村さんはそう言って少し言葉をつまらせたあと「でも松木、

今日平日だよね？」と尋ねた。

「そうですよ」

「あれ、もしかして一人でこの雨の中を駆け回ってたってこと？」

「はい」

「風邪引いちゃ駄目ですよ、すぐに風呂にでも入ったら？」

「わかった、そうします。ありがとうございます！」

「じゃあ明日は頑張ろう。またね」

華村さんはそう言って、電話を切った。

受験の結果を待つ間に、卒業式は寂しく挙行された。辛いことをたくさん経験した中学生活が、これで終わる。吹奏楽部の元メンバーたちからの連絡はない。花を渡すタイミングはないのだろうか。そう思った、そのときだった。

「松木、藤田先生に花、渡しに行こうよ」

華村さんが僕の背後でそう言って、僕の肩を叩いた。部長はきまり悪そうに箱に入った造花を持って藤田先生と一定の距離を保っている。

「松木くん、私の代わりに渡してくれない？」

部長がそう言って僕に箱を渡す。箱の上には「サボンフラワー

「…石鹸で作ったお花です」の文字。部長が渡すことを考えていた僕は仰天して尋ねた。

「なんで」

「だって松木くんは私よりずっと部長みたいじゃん。これを企画したのも松木くんだし、みんなは松木くんのために動いた。だから、私は松木くんに譲るよ」

部長はそう言って藤田先生のもとに走り、話しかける。藤田先生が振り向くと、僕は意を決してサボンフラワーを手渡した。

「先生、今までありがとうございます」

僕の言葉を聞いて、藤田先生は箱を受け取る。そして記念撮影を終えたあと、部長はずっとときまり悪そうにしていたが突然口を開いた。

「すみませんでした、藤田先生」

藤田先生がびっくりした顔で「どうしたの」と聞く。部長は泣きそうになりながら、なんとか言葉を発した。僕が部長に選ばれなかったのが不服だったこと、なんとか部長から降りようとしてわざと悪い態度を取っていたこと。そして結局部長から降りられなくて引退のときにそれを謝ろうとしていたけれど、できなかつたこと。そして、最後に僕がリーダーシップを発揮したから救われたということ。

「松木くん、ごめん。でも、ありがとう」

部長はそう言って、深々と頭を下げたのだった。

—P.S.—

最後に、全員が第一志の高校に受かったことを付け加えておく。

短歌

砂時計

近鉄に ひとりでゆられつつ眺む

センパイたちの からだの近さ

駅からの 学年指定の 通学路

ジャージのすその さんかくゆれる

前に行く ジャージのすその さんかくが

ろうそくのよに ちらちらとして

ひびわれの すきまに生きる たんぽぽは

ここにも春が きたと嬉しげ

新しい 出席番号 書きなれて

忘れたくない 記憶が遠く

花曇り 黒で揃えた トレーナー

恋人つなぎ もも色の爪

雪融けの神様

綿夏（めんか）

「此の先には楽園があるんだ。」そう言って僕の手を引いたきみの、僕よりもずっと冷たい手を、どうにかして鮮明に覚えていたかった。

隣で笑っていた在りし日のきみへ。ゆるりと傷ついたその白い手を守ろうとして、必死に握り寄せた末にきみは血を流した。僕はいつだって、きみを焼き殺す光だ。

仕方のないことだったのだと昨日のきみは僕に告げる。あんまりだと僕は呟く。誰もきみを憶えていないこと、きみがこの悲劇を仕方がないというだけで終わらせてしまうこと、僕の一切合切を赦してしまうこと、そんなのは、そんなのは、あんまりにむごい終焉じゃないか。

優しい神様は大切な少女の姿をしていた。

その虚像に泣き継ろうとして、随分と長い夢から覚めた。嗚呼、どうしようもなく救いの無い。最愛を溶かし切った僕の、僕が焦がれた、僕が殺した、きみの末路は。

留めようとしたその体温と輪郭は、たった三日と三晩ですっかり薄らいでしまった。

いっそう冷たさを増したきみの手に触れた。大切なきみの記憶はそうして上書きされていく。どこか遠くから漏れてくるようなこの嗚咽だって、きつともうあの日の僕のものではないのだから。

きみ

凍りついた身体は既に限界を迎えつつあった。遠い遠い昔に生まれた、元人間の少女。

僕

とある炎は人を象ろうとした。のち100年間ひとり进行続け、やがて静かに燃え尽きた。

楽園

「彼女」が辿り着きたかった理想郷。そこで少女が叶えたかった姿とは、人として生きていた過去の幸せか、愛した者との儚い未来か。

とある女子生徒の話

はえぬき

すみません、事件を募集していると聞いて来たんですが。確か、事件の話を集めている先輩ってあなたですよね？

名前ですか？二年三組、山中希です。正直私の話が先輩のお眼鏡にかなうか分からないんですけど、話してみようと思います。

これは私が中学生だった時の話です。私は中学三年の始めくらいから、よく物を失くしていました。どれくらい無くすかというと、ボールペンを月に二本は失くすくらい。その前から人並みよりは少し多いくらいを失くしていたんですけど、中学三年からの頻度は尋常じゃなかったんです。友達―西本花っていう子だったんですが、その子によく揶揄われていました。希は本当にぼーっとしてるんだから、よくそんなに物を失くして怒られないね、って。

私もその時は、自分は物をすぐ無くしちゃう癖があるんだ、ぼーっとしないようにしなくちゃって思っていました。つまり、何の疑問も抱いていませんでした。

それでもある日、この失くし癖を危惧し始めました。流石に失くしすぎじゃないですか。しかもボールペンの他にも

色々失くすものだから、買い足すにもお金が高張ってくる。お母さんにも怒られるし、もう散々でした。

だからメモ帳に持ち物をまとめて、一限の授業毎にそれと今ある持ち物を照らし合わせることで、失くし物を防ごうとしました。この計画は順調だったし、自分の持ち物に気を配れるようになったと思います。しかし、それでも駄目でした。

少し失くし物の数は減っていたものの、どうしても一定のペースで物がなくなってしまうのです。チェックしている時は大丈夫なのに、次にチェックしたらない、とか。私だけでチェックしているから駄目なんだ、と思って花にも確認を頼んでいましたが、それでも駄目で。花もだんだん、おかしいんじゃない？と言いはじめました。それから花に、

「希はなんか心当たりないの？」

と聞かれたのですが、わからないとしか言いようがありません。

いや、違います。心当たりはありません。

中学二年の終わりくらいに、ある人と付き合っていたんです。名前は伏せたいので、不君とします。

不君は同級生で、気が弱いけど優しい人でした。優しい人ではあったのですが、いかんせん何か気味悪くて。教えてもないのにガサツな字の手紙が投函されていたり、丁度寝ようと思った時間に「もうすぐ寝るのかな？」といったLINEが

きたり。なんというか LINE のタイピングがいつも、私の生活を監視カメラで覗いているのかというくらい正確で。

最初は真面目な人なんだなあ、とか呑気にしていたんですが、持ち物を超越させていい出すくらい過激になってきて、気持ち悪くなってきたので別れ話をしました。そうしたら、まあやっぱりというか散々抵抗されました。だんだん不君の怒りがエスカレートしてきたとき、もう怖くて怖くて花に相談しました。

え、先生に相談しなかったのか、ですか。だって、恋愛事情ですよ？ 恥ずかしくて親友くらいにしか相談できませんよ。

そうしたら花が凄い勢いで食いついてきて、

「マジで有り得ないってそれ、絶対別れるべき！ 分かった、私も協力する！」

って言うてくれました。その後、ちゃんと別れたんですが、まあその…後腐れないかと言われれば嘘です。なぜかというところ、花は頼りになるんですが少し気が強いです。猪突猛進、自分の意志を貫き通す。そのせいでトラブルになることが少ななくて、今回もそうでした。

「あのさ、不？ 私不がそんな奴なんて思わなかった。めっちゃキモいし本当最低！」

花の勢いに圧された不君は一瞬怯えたような顔をして、分かった諦めるよ、と早口で言って逃げました。しかしその去

り際、不君は

「でも俺はまだ希が好きだから！」

と叫んで恨めしそうにこつちを睨んでいきました。

そんなことがあったから、不君はちょっと怪しいなあ、と。

一応「不」は途切れていますし、その後は大人しかった上、学年が切り替わってクラスが変わったおかげで関わることはありませんでした。それでも、私の物を盗んでいこうとする人の心あたりは不君だけです。

そして、私は花にまたついてきてもらって、不君のクラスまで行きました。流星に一人では心細かったのです。花もまた怒ってくれて、とても心強かったです。

その時、不君のクラスは体育だったのか、人がいませんでした。休み時間の教室に人がいないのは不自然かもしれませんが、中学校の体育の先生は厳しくて怖かったのです、みんな早めに着替えに行っていたんです。

それでも諦めきれなくてドアを開けようとしたら、本当に開いてしまいました。多分日直が忘れていたのでしょう。教室の後ろのドアの鍵がかかっていなかったようでした。

少し躊躇しましたが、私は教室に入って不君の机を覗き始めました。なさそうだったので、机の搜索もそこそこにしてロッカーを搜索。ガサガサ、躊躇なく手を突っ込みます。花は「授業始まっちゃうよ、早く出なよ！」

と言っていました。この際授業に遅れてもいいかと思ひ捜索を続けました。

その時です。私の手はペンの束を掴んでいました。

間違いありません。私の物でした。ここ三ヶ月くらいで失くした物がすべて集まっていたと思ひます。しかも全部付箋がついたジップロックに入っていて、一つ一つの付箋に日付が書かれています。おそらく、盗んだ日付でしょう。

こと細やかに丁寧な字で書いてあるのがどうしようもなく気持ち悪く、正直吐きそうでした。

そんな私の肩を花は支え、励ましてくれて、二人で先生に言うことになりました。その後、大騒ぎしたのちに不君は転校していき、私のものが不自然に失くなることはありませんでした。

先輩、どうしましたか？惚気話を聞きたいわけじゃない、ですか。いいえ、これは惚気話じゃありません。続きがあるんです。

私には疑問がありました。本当に盗んだのは不君なのか、ということですか。

不君は別のクラスで、私は移動教室だろうが一限毎に持ち物を確認していた、と言っていましたよね。不君が授業中に私の物を盗めるとは思いませんし、授業中に盗んでいなかっ

たとしても、盗めるのは休み時間などの一瞬。しかも私は別れ話の一件から不君を警戒していましたが、花もいつも一緒にいたから盗むのはほぼ不可能と言えらると思ひます。

更にジップロックに書いてあった文字は、不君とは思えない程丁寧でした。不君は曲がりなりにも好きな相手である私にすら、ガサツな文字の手紙を送っていました。その丁寧さは、どちらかと言うと男子が書いたというより、女子が書いたような。

あ、先輩も分かってきましたか。もっと付け足すならば、なぜ花は教室に入るのを躊躇ったのでしょうか。彼女は猪突猛進な性格、まあ少しこじつけのような気がしますが、火がついたら止まらない彼女は教室にずんずん入るくらいだと思います。

そして、私が物を失くし始めたのは中学三年生の始め。不君が大人しくなった直後です。気弱な不君のことだから、かつて怒鳴ってきた花が側にいた当時の私には近寄り難かったのではないのでしょうか。

これらの情報を集めると、一番疑わしいのは一人しかいませんよね。

趣味で面白い事件の募集をしている、と友人に話したとこ

ろ、その友人づてに二年の後輩がやってきた。目立たない程度に着飾った可愛らしい女子生徒で、中学校ではさぞかし男子に人気があっただろうと思う。しかし彼女が語った事件の内容は見た目にそぐわず、胃がムカムカするような胸糞悪い物だった。

女子生徒、山中希はやりきれない、というような顔で言った。

「だからと言って花が私の物を盗む理由は分からないし、もう問い詰めたくても連絡が取れないんです。高校も変わってしまったって、お互い忙しくなって連絡をしなくなりましたから。でも、あの時は本当に親友だったんですよ、私たち」

とんでもない話を聞いてしまったな、と好奇心で事件を募集していた過去の自分を殴りたくなった。こうなってはもう真相は分からない。一体どうして西本花は親友の物を盗み、それを不君に渡してしまったのだろうか。

三年前、まだ不の教室でペンの束が見つかる前。西本花は、静かに硬貨を数えていた。

隣に開いたLINEのトーク画面には「今週もありがとう」とだけ。メッセージの送信者は、不だった。

西本花が不相手に「商売」を始めたのは、希が不と別れて

からすぐのこと。まだ希への執着がなくなっていない不を使える、と思ったのが始まりだった。花の家は母親が厳しく、着飾れるようなお小遣いはくれない。だが希はどうだろう。いつも綺麗に着飾って、物を失くしても何時間も怒られないし、すぐに新しいものを買ってもらえる。

羨ましかった。自分はどんなに頼み込んでもお小遣いは増えなかったのに。私も着飾ってみたかった、と。

不を捕まえて「希の私物を私が持ってきてあげようか」と囁くだけだった。最初は不も躊躇っていたようだったが、すぐに欲に負けた。

こうして、この地獄のような商売は始まったのである。花が希の私物を盗み、不に売りつけるだけ。だんだん希も異常さに気づいて警戒し始めていたが、花は完全に信用され切っていたので問題はなかった。

しかし、花の心は痛んでいた。羨んではいたが、希は親友だったのだ。欲に負けた自分が嫌だった。もしかしたら、さっさとこの悪事が希に露見して、なんなら嫌ってほしいくらいには思っていたかもしれない。

そして恐らく、その罪悪感が証拠を残したのだろう。

さよなら、私の最後の初日

古井論理

「あなたは確か……失礼、私のことは何一つご存知ないのでしたね。私はあなたの一つ上、つまり三年生です。旧決と申します。旧に決定の決と書いて『ふるきま』と読みます。珍しい名前ですが……と、話がそれましたね。私はあなたのことをよく存じ上げております。あなたが私を探しておいでであることも、です。しかし、一つだけ存じ上げないことがあります」

彼は、旧決と名乗った男はそこで口を一度つぐんだ。彼の風体は私と同じ「高校生」と形容するにはあまりに異質で、あまりに不思議で、どことなく落ち着いているものななぜか慌ただしい。老けた見た目に不釣り合いなほど幼さを秘めた目を眼鏡の奥に光らせていた。手元には大学ノートと銀色のシヤープペンシルを置き、静かにそれを手で弄んでいる。

「……」

疑問符が私の脳内を埋めた。全く何を言っているかわからない。それを察してか、旧決先輩はまるで答え合わせをする先生のように、ゆっくと疑問を口にした。

「あなたは、なぜ私を探していたのですか？」

私は少し言葉に詰まりながら何かを言おうとして、言えなかった。今や私の口から出そうな言葉は意味のない「あー」と

か「えー」とか「その……」といった独立語程度である。

「わかりました。まずは私から説明させて頂きましょう。私はあなたの部活における先輩です。そこまではよろしいですね？」

私は思わず声を上げた。

「よろしくありません」

「と、いいますと？」

旧決先輩はずり落ちかけていた眼鏡を鼻の上に戻し、深く大学ノートの上のペンを握った。

「私は帰宅部です。それに、あなたを探していた理由は私にはわからないんです」

「……なるほど」

旧決先輩は何か納得したような表情をして、手元のノートに何やら忙しく図表とグラフのようなものを描き始めた。私はそのペンが動くのを見ているうちに眠くなってきた、重いまぶたを押し上げようという抵抗を始めた。

「現実としか思えない夢を見たことはありませんか？」

「……はい」

「そうですね。あなたはその夢の中に取り込まれたのでしょうね」

不意に、額を何かで叩かれたような感覚が走った。

「あの……話を聞きながら寝ると凍死しますよ」

旧決先輩はそう言いながら私の肩を揺さぶる。

「吉田さん、吉田さん！？起きてください」

「吉田……？？私の名前は吉田……」

「愛理さん？愛理さん」

私の意識に暗幕が垂れる。その暗幕から漏れる光の最後の一筋が消えようというとき、目の前に何かがあるのに気がついた。

「初めまして、愛理ちゃん」

そこには、見たこともない女子高生が立っていた。私は何が何だかわからず混乱した声を上げる。

「あー……えっと、あの。その……」

「心配しなくて良いよ、私はあなたの味方」

その瞬間、私の中で何かが音を立てて組み立てられたような感覚があった。

「あなたは……私の味方」

「そう、私はあなたの味方」

沈黙のあと、不意に拡声器を通したような声が響いた。

「愛理さん……いえ吉田凜花さん、死にたくなかったら『彼

女』を信じないでください。『彼女』は夢です。永遠の眠りに誘うあなたの敵です。凜花さん、夢の中から出てきてください。あなたは一体どうしたというのですか？誰より現実を見ていたはずのあなたが、どうして」

私は何のことやらわからず目の前の女子高生の手をとる。

「これが最後のチャンスです。あなたの夢が叶い、あなたが救われる最後のチャンスなのです。死んでしまっただけは何にもならない。目を開けてください。こ。あ……は。ここに」

声はだんだんと支離滅裂になっていく。まるでノイズだらけのラジオのように、掠れていく。それが旧決先輩の声だとわかったのは、突然はつきりと聞こえた言葉からだった。

「生きてください。あなたは、凜花さん、私と同じ世界に実体を持つ私の大切な後輩です」

私の中に、ふわりと光が照らす。私がずっと目を開けたとき、そこには心配そうな顔の旧決先輩がいた。

「ここは」

「とりえず大丈夫です、凜花さん。おそらく……いや確実に、ここは現実です。私を探していた目的は思い出しましたか？」

「はい」

「よろしければ教えてください。何ですか？」

「旧決先輩にお礼を言うためです。ありがとうございました」

「突然どうしたんですか」

「私、先輩に色々教えてもらいました。なのに、それを全部忘れてしまっていました。もう大丈夫です。ありがとうございます
ました」

「教えたこと……部活の色々くらいですけれど」

「いえ、生き方やそのほか全てです」

「そうでしょうか」

旧決先輩はノートを閉じて鞆にしようと、別のノートを取り出した。今度は分厚い日記のようなノートだ。

「これは、私の日記帳です」

旧決先輩はそのノートをパラパラとめくると、とあるページを探し当てた。

「二年前のページです。ここに、私の初日と書いてあるでしょう」

「はい」

旧決先輩は一年分のページをめくる。

「ここにも、私の初日と書いてあります。そして、ここ」

旧決先輩がめくった今日のページにも、やはり『私の初日』と書かれた一行があった。

「これは一体、どういうわけなんでしょうね」

旧決先輩はそう言って首をかしげた。私は何のことやらわからず、旧決先輩とノートを交互に見ていく。

「ループしているみたいですね」

私が言うと、旧決先輩は少し困った表情を浮かべた。

「それだけなら良いのですが……」

「どういうことですか？」

「前の初日の記述には気になるところがあるんです。ループを確認すればループは終わるかもしれない、と」

「なるほど？」

「人間の関知する範囲内では、物事は法則通りに進みます。しかし、人間が知らない範囲では果たして同じでしょうか」

「……？」

『「バレなきゃ犯罪じゃない」という言葉を知っていますか？」

「はい」

「それと同じです。人間が知らなければ、法則なんてどうでもいい、というわけです」

「ほう」

「ですから、ループしていると気づけばいい。そして、この日記はその確証になり得ます。ですから、今日は私の最後の初日です」

「よかったじゃないですか」

「そうはいきませんよ、これからは全てが新しいわけですからね」

「……？」

「愛理さん、あなたがもう迷わないことを期待します。それでは」

旧決先輩はいつの間にかまとめていた荷物を背負って、日記帳を手に持ち教室を出て行く。私は立ち上がって旧決先輩を追いかけた。

「待ってください」

「時間は待ってください」

「そんなことより、ちょっと待ってくださいよ」

「え」

「私も帰るんです。一緒に帰りましょうよ」

「わかりました。では五分以内に荷物をまとめてくださいね」

風見鶏

こまつな

あらたなる母校での日々始まりぬ教壇に立つ卯月ついたち

新任の自己紹介する我の声一音高く耳に届きぬ

ヒアシンス厚い花びら一つずつもいろの星集まりて咲く

青空からシャワーのように流れ落ち白藤の粒は我が肩に触る

風見鶏のいる青い屋根に気まぐれな春風は吹く東へ西へ

道場のあなたの写真に会いに行く床みがきおり道着の生徒は

白椿

帷子渡海

これは、まだ私が幼い時分の話です。

子どもというのは不思議なもので、出来るようになったことがあると、嬉しくなつて何度も繰り返してしまふ生き物です。端から見れば、そう繰り返して楽しいのか、と思うのですが、あの頃の子どもというのはどうにもそれに飽きないのです。勿論、私もその例に漏れることはありませんでした。

私の場合、そういったものは、口笛でした。祖母から教えて貰つたそれは、体から出るとは到底思えない不思議な音が高く、低く、響く。その魅力に取り憑かれたように、私は毎日毎日口をすぼめて口笛を吹きました。何度も何度も吹いたものですから、上手くいったときの嬉しさもひとしおで、それはそれは大層喜んで母によく宥められたものです。

でも、ほら口笛つて――夜に吹いたらいけないでしょう。

あれの始まりは色々諸説あるようですが、今でもマナーとして口笛を吹くのはいけない、という教育のために、少し怖い話を交えて。これも地域によって違うらしいんですが、ほら蛇が出るから、とかなんとか言うじゃないですか。

私もそうやって言われて、大変怖い思いをしました。

否、今になれば子供騙しだったなあと思えますが。あはは、だ

つて蛇つて――ねえ。恐ろしい、のはそうでしょうけれど、怖いものでしょうか。

それでもね、子どもつてやっぱり、駄目と言われたらやりたくなるものなんですよ。

私もね、やっぱりね、ちょっぴり禁忌を犯したくなってしまつたんです。

丁度あの頃は一人で風呂に入り始めた頃だったから。祖母の家は風呂が少し母屋から離れていて、一度外に出なければならぬので、幼心に暗くて怖くて嫌なものでした。

それでも、その場は一人でしたから。こっそり、吹いてみたんです――口笛。

そうつ、と高くて細い音が夜独特の茫洋とした闇に広がりました。

私は、なんだか背徳感に興奮してしまつて、この行動が癖になつてしまつたんです。

次も、次もバレないように、とこっそりやっていました。そして、何度も子どもつばい背徳行為を犯して――ある夜。

その夜も、ひゅう、と高い音が強弱と音程を微かに変えて、夜の帳が下りた庭

に響きました。

あんまり長い時間やつてるとバレるかもしれない、という子

供心にある警戒心故に、少しだけ吹いて、止めようと思いました。

——その時、視界の端に白いものが映りました。

私の記憶が正しければ、庭に白いものなど、無かったような気がするのです。

確か、庭の白椿は数週間前にすっかり落ちてしまった上に、よく伸びた枝を鬱陶しがった祖父がすっぽりと切ってしまった筈。幼少の心は好奇に疼き、そおっと、その白い物を見に行きました。

——見えました。

確かに、見ました。

今でも睨と覚えています。

——白魚のような、腕。

美しい、女の右腕、肩から先の全てがそこに放られています。

時雨で湿った地に落ちている癖に、汚れの一つも無い腕。腕の柔らかな曲線美、真白な指はしなやかで五指が緩く脱力しており、小さな爪はまるで桜貝のようでした。それを見つけた私は、ぼんやりと、確かに蛇に見えなくもないなあ、と思います。自分でもどうしてそんなことを思ったのか分かりません。けれど、その時、そう思ったことだけは確かです。

じっくり見てみようと思って——これも今となっては、どう

してそんなことをしようとしたのか分かりませんが——しゃがみ込むと、腕がピクリ、と跳ねたものですから、私はびっくりして、悲鳴を上げて尻餅をつきました。腕は暫くぴく、ぴくと痙攣したように跳ねた後、掌を使ってずるずると動き出しました。その様子は、成程、確かに蛇でした。

その後、駆け付けた母に事情を聞かれて、こっぴどく怒られました。そうして、もう二度と夜に口笛は吹かないと誓いました。

でも、今になって思うのです。どうして母は、口笛を吹いただけで、ああも激昂したのでしょうか。まあ、そんな母ももういないので、聞くことは叶いませんが。

不思議では、ありました。その時も、今も。だって、迷信でしょう。蛇が出るなんて。泥棒の合図なんだという地域もあるそうですが——だから、なんだというのでしょうか。蛇だとしても、泥棒だとしても、夜に口笛を吹いただけで、幼い娘にあれほど憤るものなのでしょうか。

もしかして——母も、あの蛇のことを、知っていたのではないのでしょうか。

しかも、私より詳しく、正体まで。

まあ、これも、私の推測に過ぎませんから。先も言ったように、もう母に聞くことは出来ないですし。

そう、その時の母も、体験も、雰囲気すら何もかも。とても、怖かったです。

——けれど、あんまりにも怖かったです。

憶えています。

あの手はずるずると、祖父の部屋の方に這って行った、ような気がします。

今年も、白椿が咲きます。

あかくおちたらまたおしえてください。

文芸部前階段にて

秋雨 ナノ

になる。

「今日は面談の時間を学校で待ってなきゃいけないし文芸部にも行ってみようかな……」

そう思い本館三階へと続く階段の前まで来た。上から一年生が談笑する声が聞こえてくる。今日もたくさんの一年がきているようだ。

階段を上る足が重い。もしツイッターでふれあっている人物像のイメージと違っていて言われたら？もう入らなくていいって言われたら？そんなことを考えていた。

それでもなんとか階段を上りきって教室ですらない三階のスペースの活動場所にたどり着いた。

「あいつ、Twitterの公式アカと時々しゃべらせていただいていた秋です」

そう声をかけよう。そう決めていたのに声が出なかった。そうして私はそのスペースを素通りして、まるでその先にある職員室の方に用事があるかのように振る舞った。

普段自分のしないことをしてみるとか何事も挑戦とか言うけど見つかるのは嫌な自分ばかりだ。一年生がたくさんいたからなんて言い訳もしてみるけどたぶん先輩一人だけでも話しかけるなんてできなかったんだろう。

そう思うと、こんな挑戦もできないような自分をもっと嫌い